

P-107

維持療法期間における
急性リンパ性白血病の
「病気である我が子の生活を確立しつつ、
自分の生活を立て直す」親の体験辻本 健¹、横山 由美¹¹埼玉県立大学保健医療福祉学部 看護学科²自治医科大学大学院 看護学研究科 博士後期課程

【目的】

急性リンパ性白血病の患児をもつ親の体験は、子どもの入院直後、病名告知時、治療開始時、退院時までには明らかになっているが、外来で行われる維持療法の期間における体験については明らかにされていない。本研究の目的は、急性リンパ性白血病の患児の維持療法の期間における療養生活に関わる親の体験を明らかにすることである。

【方法】

本研究は、質的記述的研究を選択し、対象者は急性リンパ性白血病のうちスタンダードリスクでかつ完全寛解から5年以内の子どもの親とした。調査項目は、退院後の外来での維持療法が始まってから維持療法が終わるまでの患児の療養生活に関する出来事や印象に残っていること等について、半構造化インタビューによりデータ収集を行った。分析は、逐語録からコードを作成し、全コードから維持療法の期間における急性リンパ性白血病の患児の療養生活に関わる親の体験に関するコードのみ抽出し、類似性・相違性に基づきカテゴリを生成した。

【倫理的配慮】

本研究は、自治医科大学臨床研究等倫理審査委員会の承認を受け実施した。

【結果】

本研究の対象者は、8名(母親5名、父親3名)であった。対象者の子どもの発症年齢は3~4才であった。対象者の維持療法期間中の年齢は30~40代であり、仕事等をしてきた者は5名であった。本研究では、「治療や入院生活から成長発達の遅延を予測し悩む」、「子どもにとっての理想の生活を模索」、「子どもの居場の確実な確保」、「居心地よくあり続けるための家庭や職場の調整」、「心身のバランスの崩れ」、「再構築された生活に安堵」等の8カテゴリが生成された。

【考察】

8カテゴリの性質と関係性に注目し、「病気である我が子の生活を確立しつつ、自分の生活を立て直す」という特徴が考えられた。親は、養育者であると同時に社会的役割を担う大人としての自立も求めており、「居心地よくあり続けるための家庭や職場の調整」がうまく行かないと《心身のバランスの崩れ》が生じやすい。そのため、小児科外来においては、親が家庭や仕事の調整が円滑にできているのか情報収集し、円滑にできていない場合は、心身の安寧を図るため、心療科の受診やソーシャルサポートが受けられるよう、他職種や行政等に繋げるなどの看護支援体制を検討する必要性が示唆された。

P-108

小児看護学における
アクティブラーニングを導入した
教育方法に関する文献レビュー

上山 和子、山本 裕子、西村美紗希

新見公立大学

【緒言】

わが国の少子化は急速に進み、看護基礎教育においても子どもとの関わりが少ない学生に対する体験型の教育方法の検討が求められている。

【目的】

看護基礎教育課程の小児看護学領域におけるアクティブラーニング導入の先行研究を概観し、今後の学生の小児看護への関心を高める教育方法への基礎的資料を得ることを目的とする。

【方法】

医学中央雑誌Web版、CiNiiを用いて文献検索を行った。キーワードは、「小児看護学」&「教育方法」、「小児看護学」&「アクティブラーニング」とし、2014年から2023年の10年間とした。論文の種類を原著論文とし、59件を抽出した。その内、研究目的に沿い、12件を分析対象として抽出した。

分析方法は、選定された文献の本文を精読し、文献ごとに著者、出版年、表題、掲載雑誌、対象者、研究方法として抽出した。また、小児看護学におけるアクティブラーニングの教育内容の有効性について抽出し類型化した。分析は、小児看護学の研究者3名で実施した。

【結果】

対象文献の一覧を概観すると、最も古い文献は、2016年であった。研究対象者は、看護学生11件、高校生1件であった。学修形態としては、演習、実習、講演で、演習から実習と多岐に渡っていた。学修方法としては、ディベート学習やグループワークを用いた方法を取り入れ、前後での評価を行っていた。また、ピア評価を用いるなど、従来の授業評価だけでなく、新しい試みを用いて分析していた。

【考察】

学生は、アクティブラーニングの教育方法を受講することにより、自主的に学ぶことにつながり、小児看護学に対する関心が深まることが明らかになった。また、倫理教育など内容が、子どもの育成や社会とのつながりなど、現代の子どもの課題に対する取り組みを学ぶ機会となり、他者と意見交換をすることで多様な考え方から、子どもの育成に必要な小児看護学の役割を学んでいることが示唆された。